

ダニエル書1章8節 「心を定める人」

1A 主による捕囚

1B 神の定め

2B 主に従う

2A 良心を汚すもの

1B 主の御言葉から

2B 心を定める要素 ローマ 12 章

1C 生ける供え物

2C 世の調子

3C 思いの一新

3A 主の守りと助け

本文

ダニエル書 1 章を開いてください。私たちの学びは、ついにエゼキエル書を終えてダニエル書に入ります。ダニエル書は、神が全てのこと、国々の興亡までも主権をもって支配しておられることを教えている書物です。ある人は、神の人に対するご計画を知るのに、四つの書物を聖書から挙げました。初めに、創世記と黙示録です。創世記は全ての事の始まりを記し、黙示録は全ての事の完成、終わりを記しています。そしてマタイによる福音書を三つ目に挙げています。それは、旧約に約束されたキリストが、いかにイエスにあって成就したのかを教えているからです。旧約と新約をつなげる書物です。そして四つ目が、ダニエル書です。ダニエル書は、私たちがこれまでずっと読んで来たバビロン捕囚という歴史から、実に世の終わりまでを鳥瞰する、国々の興亡の歴史を前もって伝えています。イエス様は、世の終わりの徴として、ダニエルの預言した「荒らす憎むべき者」について、注意するようにと弟子たちに教えられました(マタイ 24:15)。

今朝はその中で、ダニエルの人生の第一の特徴とも言うべき言葉に注目します。1 章 8 節です。「**ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。**」背景はバビロン捕囚と申しあげましたが、エゼキエルが捕囚の民であるユダヤ人と共にいたのに対して、ダニエルはその都バビロンの宮廷の付近にいました。全く、ユダヤ人の生活からかけ離れた所で、王に仕えるユダヤ人を育成するべく、彼と友人三人がダビデ家の王族や貴族から捕え移されてきました。そして三年の間、カルデヤ人の文学と言葉を徹底的に教育させられました。カルデヤ人とはバビロンの元来の民族であり、日本というならば大和民族です。そして名前まで、変えられました。ダニエルとその友人三人は、それぞれヤハウエの神に因んだ、敬虔な意味が含まれていましたが、それがバビロンの宗教、異教の神々の名に因んだ名前に変えられました。このように徹底的にバビロン化をユダヤ人である彼ら

の施していたのですが、彼らはその中で、自分たちが王に仕えながらも、本質的には主なる神ご自身に仕えているという意識は失っていませんでした。いや、むしろ祖国から引き離されていたところで、しっかりと主なる神に思いを馳せていたのです。

その中で、これだけは避けなければいけないとみなし、避けることを心に定めたのが、ここにある「**王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒**」でありました。王に仕えるために、王ネブカデネザルは容姿や顔つき、体づきも気にしていました。そして、王のごちそうを食べることによって、王のものになる、王と一体になるという意味合いもあったことでしょう。同じものを食べることによって、より一層、バビロン化がなされるものでありました。けれども、ここにおいては、王に従っていながら、主ご自身に従う、身を汚さないようにすると心に定めていました。ここでの、「心に定めている」というダニエルの勇気に、今朝は注目したいと思います。

1A 主による捕囚

ダニエル書は、イスラエルの神に仕えるのとは全く異なる環境で、異教の社会の中で、それでも主に忠実に仕える僕たちの証しであります。バビロンは世界帝国の都であり、その大きな都は空中庭園があるなど、とんでもない富と栄華を誇っていました。それと同時に、異教の神々に仕える儀式や慣わし、忌まわしい行ないが根付いているところでもありました。私たちの信仰生活と似ていないでしょうか？国としては先進国、経済大国である日本ですが、完全な、多神教の異教社会であります。ですから、偶像に仕えさせるような制度があり、絶えずその緊張の中に暮らしています。そして、ダニエルと同じように、明らかに主の命令に違反すると心の良心では分かっていることを、しなければいけないという圧迫を受ける時があります。ですから、ダニエル書は私たちにとってあまりにも身近な書物、知恵に富んだ書物です。

1B 神の定め

ダニエルがなぜ、ここで自分の身を汚すまいと心に決めることができていたのか？その秘訣が1章2節に書いてあります。「**主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。**」紀元前605年に、ネブカデネザルがエルサレムを襲ってきた時に、このように神殿のある器を運び出し、そして自分の神々、すなわちバビロンの神々の宝物倉の中に納めました。そしてダニエルなどの王族や貴族も捕え移してきたのです。この時、誰がそのようなことをしたのかが、ここに書かれています。「**主が**」これらの器具の一部をネブカデネザルの手に渡したとあります。自分たちにとっては、あまりにも屈辱的な出来事でありましたが、しかし、主がそこに彼らを置かれたのだ、という意識がありました。ゆえに、自分にとっては不本意なところにいたとしても、けれども、そこに置かれたのは間違いなく、主ご自身なのだということを彼は知っていたのです。自分が主によって置かれている、バビロンこそが自分が主に仕えるのに選ばれたところなのだという確信です。

私たちは、どこかで「このような環境であれば、主がそこにおられて、そうでなければ、主から離れている。」というような意識をどうしても持ってしまいます。自分が快適でいられる環境がこれだ、というものを持っていて、それでそこから離れると主ご自身もおられないのではないか？と思ってしまうのです。いいえ、多くの場合、主がそこに置いておられるのです。主が呼び出され、そこにいるようにされたのです。ヨセフのことを思い出してください。兄たちによって、エジプトに売られました。これが、どうして主がなされたことだと思えるでしょうか？けれども、ヨセフは主が共におられることを知っていました。だから、自分の主人ポティファルの家が栄えました。そして、主人の妻に共に寝るように言い寄られても、「神を恐れる者である」と言って、そこ場から逃げることができました。彼は後にエジプトの総理大臣となり、パロからエジプトの宗教の祭司の娘を妻として与えられました。かなり異教的ですね。しかし、それでも彼は主を忘れていませんでした。息子二人が生まれた時に、それぞれ「神が私のすべての労苦と私の父の全家を忘れさせた。」「神が私の苦しみので私を実り多い者とされた。(創世 41:51-52)」という意味の名を与えたのです。そして、兄たちに自分がヨセフであることを明かした時に、こう言ったのです。「神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。(45:5)」そして父ヤコブが死んだ後には、「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのために計らいとなさいました。(50:20)」と言ったのです。主がエジプトにヨセフを遣わしておられたのです。そして、兄が彼を売るというところに、主はご自分の御心を置いておられたのです！ダニエルも同じでした、バビロンに自分が今いるのは、ネブカデネザルが自分を引っ張ってきたのではなく、紛れもなく主ご自身がここにお遣わしになったからだという召命、確信があったからです。

主イエスは、昇天される前に、私たちに国々をご自身の弟子としなさいと命じられました。その国々とは、福音が伝わっていないところ、神を知らない人々が住むところです。自分がクリスチャンとして生きるのは苦しいところだ、主がそこにはおられないのではないかと感じる所があります。けれども、その感覚は間違っています。そこにこそ、主がおられるのです。イエス様は言われました。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいる。(マタイ 28:20)」主は、神を知らない人々の間に私たちをそれぞれ、遣わし、そこに置き、そして「わたしはいる」と宣言しておられるのです。

新約聖書の時代、ローマ時代は、奴隷制度によって成り立っていた社会です。数多くの奴隷がいました。そうした人々が、イエス様を自分の主として受け入れ、信じ、救われていきました。奴隷ですから、今の会社生活よりもはるかに苛酷です。給料がないのです、自分の手にできる賃金はないのです。今、いくら企業がブラックであると言っても、社畜という言葉を使っても、全くの無賃金ということはあり得ませんね。そして、奴隷として使役されている所から逃げ出すものなら、主人は殺しても、何ら罪に問われませんでした。しかし、パウロはこのように言うのです。「おのおの自分の召されたときの状態にとどまっていなさい。奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。(1コリント 7:20-21)」

奴隷の時にイエス様を信じたというのは、そこに実は主の御心があるということです。主人に仕えることによって、そこで主イエス・キリストがおられることを証しすることができる、ということです。

そしてパウロは、バランスを持って話しています。「しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。」とのこと。無理をしてその状態にいる必要はない、自由になれるのなら自由になりなさい、とあります。これも大事なことで、キリスト者は、「自分がそこにいなければ、この人は救われない、この人たちは救われない。」と、固執してしまうことがあります。けれども、救うのは主ご自身です。そこから離れて構いません。けれども、基本的に気にする必要はなく、自分がいるところがまさに、主が召してくださったところであり、そこで証しを立てます。

2B 主に従う

ですから、キリスト者はその職場、その学校、その家庭において、そこで仕えることが、神の御心にかなっているということになります。そこにいて、自分に命令する上司に従うのは、まさにキリストご自身に従うのと同じです。エペソ書 6 章にはこう書かれています。「6:5-6 奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。人のごきげん取りのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。」教会にいる時には、喜んで主に仕える。これはもちろん、すばらしいことで、御心にかなったことです。けれども、職場や家庭、学校に戻ったときも、同じように心から地上の主人に仕えるのです。

当時、奴隷に対してこの言葉を話したことを思い出してください。そこは生々しい労役の現場でした。そこにはもちろん、キリスト者として正反対の価値観があります。泥水のような現場があります。けれども、主がダニエルをバビロンに遣わしたように、ヨセフをエジプトに遣わしたように、そこに留まる必要があります。共に、その泥水の中にいることが必要です。上司や同僚にある罪を糾弾することは簡単にできるでしょう。しかし、それでもそこにいて、彼らのために祈り、執り成し、積極的に従っていく時に、信頼関係が生まれ、時が来て、御心がかなっていきます。ダニエルは、その忍耐のミニストリー、働きによって、その横暴な君主ネブカデネザルが、晩年に獣のようにされた後で理性を戻し、主をほめたたえたという記録が 4 章にあるのです。

ですから、バビロンこそが主に仕える場でありました。バビロンに捕え移されて、エルサレムから切り離された民に対して、主はエレミヤを通して言われました。「エレミヤ 29:5-7 家を建てて住みつき、畑を作って、その実を食べよ。妻をめとって、息子、娘を生み、あなたがたの息子には妻をめとり、娘には夫を与えて、息子、娘を産ませ、そこでふえよ。減ってはならない。わたしがあなたがたを引いて行ったその町の繁栄を求め、そのために主に祈れ。その繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。」このようにして、バビロンの町の繁栄を願うことは、自分たちの繁栄なのです。

2A 良心を汚すもの

しかし、それは全てのことについて従うということではありません。「キリストに従うように、…地上の主人に従いなさい。」と先にパウロが言いました。キリストに従っているという核があってこそ、この世における善い行いであります。ですから、主に仕えるというその核の部分に主人が触れるような時、彼はその命令を拒まないといけません。

1B 主の御言葉から

「**王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまい**」と言っています。私たちの現代社会では、これの意味するところはあまりありません。というのも、バビロンにあった異教の食生活もないし、また私たちはダニエルのようなユダヤ人ではないからです。ユダヤ人には、モーセの律法があり、そこには食物規定があります。動物でも、反芻しないもの、蹄のないものは汚れたものとされ、食べてはいけません。水の生き物は、鱗の無いものはだめでした。昆虫では這うものは汚れています。また猛禽類もいけません。そして血のついたまま食べては決していけません。こうした汚れたものを食べてはいけないのですが、バビロンでは数多くそのようなものがでてきたでしょう。そして、バビロンも、新約時代のギリシヤ・ローマ社会も、良い肉は必ず調理の前に偶像の宮に供えをして、それから食べます。ですから、自分の身を汚すのです。

主に自分が仕えている中で、何をもって自分を汚すのか？それは、ダニエルが行なっているように、神の言葉に書かれていることに従ってであります。ダニエルはモーセの律法の中にいました。キリスト者は、キリストの律法の中にいます。新約聖書にある、使徒たちの教えにある規範があります。ユダヤ人と同じように、偶像礼拝や不品行はいけません。偽りもいけません。盗みもいけません。酒乱もいけません。陰口や中傷もいけません。これはモーセの律法だけでなく、使徒たちが手紙の中に教会の信者に教えていることです。そして疑わしいことがあるでしょう。

どちらか分からない、というものがあります。その時に大切なのは、「信仰と良心」です。ある人にとってできていることであっても、自分がそれを行って罪であると思うなら、それは信仰によるものですから、やってはいけません。「ローマ 14:22-23 あなたの持っている信仰は、神の御前でそれを自分の信仰として保ちなさい。自分が、良いと認めていることによって、さばかれない人は幸福です。しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。」例えば、切支丹の時代、踏み絵というものがありました。そこに十字架のイエスや、その母マリヤが刻まれています。それを踏むのかどうか、という問いかけですが、それは踏み絵という対象物そのものが大事なのではなく、それをそこにいた信者たちがどう見ていたのか？が大事であります。それを踏むことが、奉行所にとっては、彼は転んだ、信仰を棄てたと見なしているのですから、人の前でキリストを否んだということになりますから、だからキリシタンのほとんどは踏むのを拒んだのです。このように、その時々主から与えられた信仰と良心があります。それに従うのです。

2B 心を定める要素 ローマ 12 章

「心に定め」という言葉があります。これは、決心した、そう心に思い、決めてしまった、ということです。主に仕えると決めた人々の心です。自分がどこにしようが、何をしようが、いつでも、「他の人々が他の神々に仕えても、私は主に仕えます。」と言ってしまふところの決断です。バビロンにおいて主に仕えていたのですが、自分が主に仕えているという、いわば「聖域」に誰かが入り込んで来たのであれば、その聖域を守る、ただ主に仕えるのみ、であります。このような、思いと心における神への献身が、ダニエルとその友人三人の生涯を貫いていました。3 章において、三人の友人が、金の像の前でひれ伏すのを拒み、燃える火の炉の中に投げ込まれた時も、全く臆することなく拒んだこと。そしてダニエルが、全く臆することなく、いつものように主に対して祈りを捧げ、獅子の穴に投げ込まれたことがあります。

心に決めること、献身することを述べているのが、ローマ 12 章です。「12:1-2 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

1C 生ける供え物

一つに、自分自身を「生ける供え物」とすることです。もう主に捧げるのだ、と決めてしまいます。実は、ここにおられる皆さんの多くが、そのように決めておられます。主イエスが、私たちのためにご自身の体を父なる神に捧げてくださいました。そこにある神の憐れみにしたがって、私たちが主に、全ての事を任せてしまうのです。結婚後、何か合わないことがあって、「この結婚は果たして御心だったのだろうか？」なんて悩むなんてことしますか？その迷い自体が、結婚という意味を弁えていないですね。結婚の誓約において、「その健やかなるときも、病めるときも、富めるときも、貧しきときも、死が二人を分かたずときまで、命の日の続く限り、あなたの妻(夫)に対して、堅く貞潔を守る」と同意しているのですから、そんなバカバカしい話はありません。そのように、イエス様に仕えることを決めてしまいます。

2C 世の調子

次に、「この世と調子を合わせてはいけません。」であります。ここの調子を合わせるというのは、型にはまるという意味があります。バビロンという文化や制度の中で、その型にはまっただけとはいえない、といいます。私たちは、信仰を持つことは、一つの信仰生活、教会生活の型にはめられることを言うのか？と疑問に持つかもしれません。いいえ、キリスト者になることは、内側から変わることを意味しますが、外側から変わるように圧力をかけることではありません。むしろ、この世というのが、絶えず、神のかたちに造られた人、その自由人を型にはめるべく、強い圧力をかけていま

す。私たちは、そうした世の流れがあまりに当たり前になっているので、まさか型にはめられているとは思っていないでしょう。福音と、世のもたらす型との違いは明白です。世の調子は、「これこれをやらないと、罰せられるのではないか」という恐れが先立ちます。強制力が働きます。けれども、福音は、「神がこれだけのことをしてくださったから、その命令に従いたい」という愛の動機に基づいています。

3C 思いの一新

そして、「心の一新によって自分を変えなさい。」とありますね。この「心」は正確には、「思い」です。自分の思っていることを、何が良いこと、何が神に受け入れられ、完全なことなのかを弁え知りながら、思いを変えるのです。これは、内側から変えられることです。新しくなった思いによって自分を変えていきます。ここには、極めて主体的で、能動的な営みがあります。主に従うことは、とても創造的なことです。生き生きとしていることです。主に従うこととは、どういうことかを、祈りの中で主体的に考えます。イエス様の恵みによって成長するにしたがって、主が自分に何を御心にしているかを知ることができます。大事なのは、主に自分の全てを明け渡し、信頼していることです。

3A 主の守りと助け

そして、この後、ダニエルは宦官の長に、野菜だけを食べて、十日間試してくださいと頼みます。顔つきなど変わっていれば、宦官の長は罰せられる、つまり殺されてしまいます。それを恐れていましたが、十日間だけ試してくださいとお願いしました。そこで大事なのは、9 節に、神が彼にダニエルを愛し慈しむ心を与えられた、と書かれてあることです。主が好意をダニエルに持たせるようにしてくだしました。そして十日間の野菜だけの食事で、ダニエルと友人三人は、顔色も体つきも他の少年より良かったとあります。それから三年後、王の前に出て、王に仕えることになりましたが、知識や理解力について、幻や夢を解き明かすことについて、他の呪法師や呪文師よりも、十倍もまさっていた、とあります。

そう、私たちが心を定めるとは、信仰によって後のことを任せることに他なりません。自分は主にすべてを任せてしまうこと、そうしたら主が必ず責任を取ってくださると信じることです。しばしば、私たちは「迫害を受けたらどうするのか？」という議論をします。もちろん、弟子になるためには、犠牲があるのだということを覚悟しなければいけないことを、費用を考えてイエス様についていくことについてイエス様は語られました。しかしそれは、「こんなことが起こるかもしれない。けれども、主がその中でもおられることを信じて、前に進もう。」と心に定めることです。結婚の誓約であれば、健やかな時だけでなく、病んでいる時もあるかもしれない、けれどもこの人と一緒になろうと決めることです。前もって、こうなったらどうなのだろうか？と思っているのは、信じることではなく、恐れから出ていることであり、恐れているということは、まだ自分ができるかできないかの可能性の中で語っているためです。主に任せるということは、このように神が助け、守ってくださること、どんなことになったとしても神がそこにおられることを信じることです。